



「土砂災害・竜巻・豪雪
（わかる！取り組む！災害と防災5）」

帝国書院編集部 編
帝国書院，2017年2月
48頁，3000円（本体価格）
ISBN 978-4-8071-6331-1

わが国は豊かな自然に恵まれており、四季折々の美しい景色を楽しむことができる。その一方で、自然災害も数多く発生し、毎年のように尊い命が奪われる事象が起きている。こうした自然災害に対して、その発生のメカニズムを知り、いざという時の対処方策を知ることが、災害から身を守るうえで非常に大切である。この「わかる！取り組む！災害と防災」シリーズは、その点で非常に有益な内容である。1巻から4巻は、それぞれ「地震」「津波」「火山」「豪雨・台風」であり、本書の「土砂災害・竜巻・豪雪」をあわせると、わが国の自然災害をほぼ網羅することになる。

本書は学校図書館向け図書として、概ね中学生程度を対象としているものと思われるが、執筆者としては久保純子氏、宇根 寛氏、坪木和久氏、西村浩一氏と、各分野の一流の専門家をそろえている。まず災害発生のメカニズムを分かりやすく解説し、災害事例の紹介、そして災害対策や災害から身を守る方法などが紹介されている。写真や図を多用し、分かりやすい文章での解説がなされている。

第1章「土砂災害」では、まず日本の自然環境と土砂災害の関係が述べられている。日本は世界の中でも土砂災害の非常に多い国であること、その要因として、起伏に富んだ複雑な地形に加え、世界的に降水量が多く、特に梅雨や台風時期に大雨が集中することなどが挙げられている。2014年8月の広島市での土石流被害の例では、大きな災害となった背景に土砂災害警戒区域の指定の遅れやハザードマップの未整備が指摘されている。読者にとって特に有益なのは、土砂災害から身を守るために必要な事項が詳しく述べられている点である。ハザードマップなどで自分の住む地域が土砂災害の危険があるかを確認すること、土砂災害警戒情報や避難勧告等の情報に注意し、早めの避難に心がけることが挙げられている。夜間や大雨時などで避難場所への安全な避難が難しい時には、近くの頑丈な建物の2階以上に避難するか、家の中でも崖や溪流か

ら離れた少しでも安全な場所に移動することなどが述べられている。土砂災害の前兆現象や言い伝えについての記述も面白く、避難の判断にも役立つ情報である。

第2章「竜巻による被害」では、まず竜巻発生のメカニズムが積乱雲との関係で分かりやすく解説されている。また、日本は単位面積当たりでの竜巻の発生数が比較的多い地域であること、夏場だけでなく年間を通じて発生し、1日のどの時間帯でも発生するという指摘は、専門家には周知のことであろうが本書の読者には興味深い内容と思われる。2005年から06年にかけて、酒田市、延岡市、佐呂間町で立て続けに人的被害を伴った竜巻が発生し、それが国の竜巻対策を進展させ、竜巻注意情報などの情報の発表につながったことが紹介されている。竜巻などの突風対策としては、竜巻注意情報などの発表に注意すること、そして、実際に竜巻が接近した際に身を守るためにとるべき行動が、イラストを使ってひと目でわかるように工夫されている。

日本海側は世界的にも降雪量の多い地域である。第3章の「豪雪による被害」では、なぜこうした大雪が降るか、気圧配置や大陸からの冷たい北西の季節風、日本海を流れる暖流、そして山岳の影響が簡潔に説明されている。大雪の事例としては、低気圧によるものとして関東・甲信から東北地方の太平洋側に大雪をもたらした「平成26年豪雪」、季節風の例として日本海側の山沿いを中心に大雪となった「平成18年豪雪」が紹介されている。大雪による犠牲者の多くは除雪作業中に起きている。雪国での人口の減少や高齢化がその背景にあるとのことで、ボランティアの受け入れを進める取り組みや除雪を必要としない住宅（克雪住宅）なども紹介されている。また、生活の中に雪を利用する工夫として、わが国だけでなく外国の例も紹介されていて興味深い。

本書は防災に必要な知識がコンパクトにまとめられており、広く一般の人に読んでいただきたい一冊である。また、研究者や気象予報士などが市民向けの講演をする際などにも、防災知識の普及という点で非常に役立つ内容である。ただ、装丁が立派で図や写真が多用されていることもあり、ページ数のわりに価格が高いのが残念である。

（気象庁OB 瀬上哲秀）